

批評・紹介

中國農業史研究

天野元之助著

昭和三十七年八月 東京 御茶の水書房
A5版 本文九一八頁 索引一六頁

(一) 戦後における東洋史學界の特色の一つに、所謂社會經濟史の發達があげられる。中國の場合、各種の産業のうち、農業の占める地位が壓倒的であつて、工業であれ商業であれ、農業の性格に規制される面が甚だ多い。それ故、中國社會の研究には中國農業の、社會經濟史の研究には、農業史の研究が前提となるといつても過言ではない。一方この面の研究は、特に土地問題において多くの論攻が發表されているが、それに対応する生産力に關するものは—即ち農家經營、農業技術等の研究は—それにとまなわぬ恨があつた。然し先年は西山武一・熊代幸雄兩氏の手になる「農民要術」の完譯がみられ、幸いに今また天野博士の「中國農業史研究」が公刊されるに及んで、我々もこの面によりやく明るい光を見出すことが出来るようになった。

天野博士は大正一五年京都帝國大學經濟學部を卒業後、直ちに南滿洲鐵道調査課に籍をおき、以後終戦歸國まで二三年の長い間、中國農業の調査研究に従事し、歸國後は、京都大學・大阪市立大學において研究一途の生活をすごされてきた中國農業史の泰斗である。

その間、大著「支那農業經濟研究上・中」、及びその下巻にあたる「中國農業の諸問題上・下」・「支那農村雜記」以下、各種の學術専門雜誌に數多の論文を發表されていることは、學界周知の事實である。本書の高い學問的價值は、昭和三八年度の學士院賞の榮譽に輝いた事實が何よりも雄辯に物語っているが、これもかかる經歷と業績を持つ博士の、後半生をかけた成果(自序)といへば、この名譽も蓋し當然の事であらう。

(二) さて本書の構成は、第一編作物編、第二編栽培篇、第三編農具篇、の三篇よりなる。作物栽培の場合には、播種すべき種子を選び、次いで入念な栽培管理を行ない、更に收穫後にそれを加工して食物とする、という生産工程の順序に編目がたてられているが、この構想は、本書が中國農業技術の史的解明を目標としていることを意味するものであらうか。各論文は長編で且資料が充満しているため一見して壓倒されるが、文中處々に要約があつて讀者の理解をたすけている。

(第一編) 第一編は三章と附論一とよりなる。第一章は「中國の黍・稷・粟・梁考附玉蜀黍」と題し、古書にあらわれる各種の穀名を網羅的に蒐集し、これに一つ一つ綿密な考證を加えている。最初の黍では、發掘品中の古い穀粒の報告に關して批判された後、古文獻中の黍・稷・秬等のキビ系穀物の種類について比定し、最後に黍の發生地について、中國發生説の諸家の論を紹介している。稷・粟・禾・穀・粟・梁は禾を意味し、中國における禾の栽培はきわめて古い、中國起源説を引用している。蜀黍(高粱)は經典には見えず、かなり古くから栽培されていたとしても極く一部で、元・明

・清と時代が下るに従い、これまで遊んでいた土地に種植されて、今日の普及を見たもので、原産地はアフリカであるという。第二章「中國の麥考」では「小麥は古代では往々麥と簡單に呼ばれ、甲骨文にも麥と來(小麥)の字がある」という胡錫文氏の説(胡錫文主編「麥」上編の導言 中國農學遺產選集 甲類第二種)の批判から始まり、大小麥が判然と明示されなかつた時代の「ムギ」は大麥であり、小麥は後に中國にはいり、おそらく「スリウス」とともに、漢代に西域ルートを通じて傳來したものといひ、また横麥は「カワムギ」であると言ふ結論に達している。博士は第四節・第五節において、小麥に附隨する粉食と、調整器具である「ウス」の問題を取扱っているが、餅は文獻の上で揚雄の「方言」が初見であり、漢代の副葬品中に一應完成した形式の磨だけ發見できるというのも、博士の所論を裏付けるものであらう。第三章は「中國の稻考」で、第一節より第四節までは、中國の野生稻・古代江南の稻・中國の出土米・古文獻のイネを對象として、中國古代の稻が日本系か印度系かの問題を中心に論じたものであり、第五節「稷と秫および占城稻」では宋以後の史料に見られる秫・粘・粘・黏・占・香稻・赤米の系統の探究に重點をおき、占城稻以下、秫粘粘黏占はいずれも秫、すなわち印度系のものであり、香稻には、宋の史料では稷あり秫ありであるが、いずれも「ウルチ」に屬し、明清の書になると「モチ」に屬するものも出るといふ。その他、第九・第十節では「有芒種・無芒種」・「早稻と晚稻」と、全編で多角的に、中國に産する稻の品種を論じているが、要約するには私の手に餘るものがある。附論の「殷の世に稻を植えたか」では、仰韶期には稻の粗殼の壓痕があり、周代に稻の存在していた事も明らかであるが、甲骨文字に

は稻と断定できる史料がないので一應断定をさしひかえる、という慎重な態度をとっている。附の「中國養蠶考」は、中國上古の繭は、原種の「クワコ」の繭で、先秦漢代の間に次第に家蠶の發達を見た事を證し、併せて各時代における養蠶・絹織の技術の大略を述べたものである。

以上は第一編の要旨であるが、古代の史料から穀名を決定づける事は至難の事であつて、例えば、「稷」一つを見ても、粟(齊民要術)、黍に相似たるもの(唐新修本草)、ウルキビ(本草綱目その他)、高粱(程瑤田)等色々あり、これを結論づける事は容易の業ではなく、今博士によつて指針を與えられた事は、後學者者に多大の便宜を残されたものである。

〔第二編〕 第二編の栽培篇は、第一章「水稻作技術の展開」と、第二章「棉作の展開」とよりなる。前者は最初に、太湖西山の稻作を對象とした陳翦(南宋の人)の農書の中に、中國における水稻作技術の定式が認められると斷じ、その技術内容を解説している。次で第二節より六節までは、陳翦の農書に至るまでの、即ち先秦から宋代までの水稻栽培の發展を述べたものである。その間で問題になる古代の稻作が一年休閑であるかどうかについては、周禮の鄭玄注を一年休閑と解し、齊民要術の歳易は、單に連作を避ると解すべきか、或は一年休閑をとまらうのかは、慎重をきしている。七節以下は宋代で定式化された水稻作が、其の後如向に各工程各工程で改良され、また地方的にどのような特色を持つようになったかを、農書のみならず、地志も驅使して詳細に述べたものである。附の「解放後の水稻作法」は特に注目すべきもので、所謂八字憲法の「土・肥・水・種・密・保・管・工」の順を追つて、解放後の水田耕作の

技術を述べ、我々が疑問視していた多收穫農法は、八字憲法の各部門の研究改良の成果であつて、決して誇大の宣傳でない事をわかりやすく教えて呉れると共に、農業といえども、その時点における科學技術、社會條件の總力を結集する事がどんなに大切であるかを示すものとして、中國の現在に關心を持つものゝ必讀の文であろう。

第二章の「棉作の展開」は、「棉花の傳來」において後漢の頃海南島に、南北朝になつて高昌國に棉花の記録があるが、宋末元初にかけて、南方から江南へ、西域から陝西に傳播した事を明かにし、次いで「農桑輯要」・王禎「農書」・魯明善の「農桑衣食撮要」等を史料として、元代の棉作技術を述べている。第四節・第五節の「明代の棉作普及」・「明代の棉作技術」において、明代になると棉花は全國的に普及し、各地に新品種があらわれて來ると共に、地理的條件に應じた種々の栽培法が確立し、特にすぐれた山東・浙江餘姚の棉作法が各地の後進地帯に導入された事を述べ、資料としては徐光啓の「農政全書」を推賞している。次いで「清代の棉作發展」・「清代の棉作技術」において、清代の史料に民國の史料を補なつて、明代に一般化した棉作が、人口の増大、清末の原棉輸出、或は國內紡績工業の發達と共に、一段と増加し、棉花を主體とした商業的農業經營が一部の農家に見られるようになったとく。最後の附表は元・明・清の棉作栽培の技術の發展・相違が一目でわかつて、きわめて有用なものである。なお「民國時代の棉作發展」と「解放後の棉作發展」が附せられている。

【第三編】 第三編は農具編で、第一章「青銅製農具考」は今日まで中國で出土した青銅の鏟・鋤・犁・鋤等々を列擧して、郭沫若氏や貝塚氏が銅製農具の存在を否定したのに對し、鐵製農具の出現

の前に、石製農具に介在して、公田や、氏族ないし軍隊の屯墾時に青銅製農具が見られたらう、という博士の從來からの主張を再確認したものである。附論の「殷代の銅と錫」は、當時の原料は南方より運搬されていたものというよりは、殷の境域内で原礦の探索につとめ自給への努力を拂つたものと解する方が合理的であると主張している。第二章「スキの發達」は、内容的には本書の中心をなすもので、博士は「すなわちこのスキこそ、農業の經營規模、そしてまた生産力を左右するとともに、社會組織、勞働秩序と密接に結びつき、社會關係に變化をひき起させるような一つのモメントをさえもつものである(七〇八頁)」という見解の上に立つて、第一節「手工具の發達」・第二節「牛耕具の發達」・第三節「作條型より耕型へ」の三節は、手工具から牛耕具(作條型)への變化(大體春秋戰國の時代)、さらに作條型より耕型への發達移行(三國時代)、更には唐宋における水田用耕型の發生から、現在使用されている型に至るまでの犁の發達を、段階的に詳論したものである。最後の第四節「農業史上より見たスキの役割」は、上記三節で述べたスキの發達過程を軸として、それにもなうローテーションの變化、經營規模の變化等をおりまぜて、大きくいって、中國四千年の農業部門における生産力の發達を鳥瞰しようとした野心作である。博士は中國農業史上において農具や技術の發達が大きく顯現する時期を、(1)春秋戰國の時代、とりわけ戰國の時代(2)三國・晉・南北朝時代(3)唐宋時代の(4)中華人民共和國の成立後の農業、と四時期に認めているが(自序による)、本章こそはその見解を支える背骨を形成するものである。第三章「ウスの發達」は、杵臼・碓・磨・磑・碾・碾磑の調整機具の構造を説明し、且つ各器具の發生の時期を文獻上より探索し、調

整數物の普及と相互に連關させて考察を下している。

以上はこの大作に對する私の拙ない紹介であるが、さてこの大著を讀んで第一に感ずることは資料蒐集の範圍の廣さである。例えば、第一編穀物の場合は、文獻史料では不充分であるため、歴史に直接關聯する考古學的遺物、甲骨・金文の史料は勿論、作物學・栽培學の分野に、更には遺傳學の専門雜誌にまで史料探索の手を擴げている。この廣い史料蒐集力は正に博士でなくては出来ない藝當であろう。同時に附言したいのは、疑問點の解決によせる博士の熱意である。戦後中國の考古學的發掘の進展にともなつて、數多くの農業史の資料が發見され、研究報告が出ているが、博士は疑問の個所は私信をもつてとい正し確證の追求につとめている。本書中各處に挿入された中國學者の返書は、この熱意の表明である。然しこれは何人も容易に出来る事ではなく、常に密接な學術交流を行ない、中國學者に深く畏敬されている人にして始めて可能な事である（この點について齊本之「中日兩國の農學者の友情」「人民中國」一九六三年六月號を参照されたい）。また本書中の諸論文は、以前に發表されているものであるが、それらが大幅に改訂され、又書き加えられているのも、學問に對する熱意のあらわれであらう。

第二は、農書の綿密な校勘である。自序で、

北京留學當時買つておいた『齊民要術』（四部備要本）・『王禎農書』（孫星華校訂本）・『農政全書』（貴州糧署刊本）のごとき、圖書館所藏の諸版本と對校してみても、いずれもそのテキストたり得ない事を發見した。それからは、あるだけの版本を机上に並べて、一つ一つ仔細に吟味し、その校勘・比較という全く目立たぬ仕事に、やり場のない精力と時間をつかった。校勘の仕事といえ

ば、唐の陸龜蒙の『耒耜經』は、わずか六五〇字程の短い文章だが、十數種の版本を搜し出し、それを比較して、結局、(1)『笠澤農書』系統本、(2)『津逮祕書』系統本、(3)『重編百川學海』系統本に三大別しえたものの、いずれの版本も、それだけで事たりるといふものが無く、自分で定本を作らねばならなかった。また明の黃省曾の『理生玉鏡稻品』一〇五〇餘字の小文も、これに似た經驗をもつた。

と校訂・比較に費した勞苦のなみなみならぬことを述懐しているが、この經驗にもとづいて、本書中に引用された多數の農書について、刊本批判と各々據るべき善本を示された事は、後學者にとつて、蓋し計り知れない恩恵である。嘗つて博士は中國から多數の古農書が出版された際に、刊本の選擇にあやまりなきやを心配されたことがあつた。それは十餘年の校訂の勞苦による自信が發した言であつたが、果して後に刊行された農書は、博士の心配した通り、必ずしも最善のテキストばかりでなかつた事は、すでに横山氏も指摘した通りである（横山英氏の本書書評・歴史學研究二七五號）。

第三は史料に對する日常の注意と、零細史料の驅使である。例えば、「解放後の水稻作法」・「解放後の棉作發展」では「人民日報」の記事が資料として重要な地位を占めている。これらはともすれば讀み過してしまひ勝ちなものであるが、博士はこれらの記事を看過することなく適所に生かして、新中國の増産運動を體系的にわかりやすく我々に知らしてくれている。このような技は、中國農業に對する秩序だった、體系的知識を背景にしてこそできる事であるが、それにしても常日頃の資料に關する鋭い注意と、勞をいとわぬ心懸を必要とするものであつて、無言の中に、心の持方一つによつて史

料は必ずしも「乏しきを憂う」必要のない事を示し、後學者に大きな教訓を興えているものであらう。

以上要するに、本書の價値を一言にして評せば、完璧ともい得る史料の蒐集と、一〇餘年にわたる版本校訂の上に立つて、四千年の農業技術史を大観したもので、後學者が安心して依據できる底本を提供したという事にあるであらう。

(三)

本書の技術的内容、即ち個々の技術や農法の問題については、恐らく人によって異なった意見なり、批判なりがでるであらう。それは現段階においては、農業技術の個々の問題は餘り研究がゆき届いていないからでもあるが、同時に個々の技術内容は、それ自體だけではなく、前後の作業と併せ考えて、初めて合理的に理解できるケースが多いからである。今例を有名な漢書食貨志中の趙過代田法、「其耕耘下種。田器皆有便巧。率十二夫爲田。一井一屋。故晦五頃。用耦犁。二牛三人。一歲收常過穰田晦一解以上」の一句、「用耦犁。二牛三人」の語にとつてみよう。所で、乾地農法の最も重要な點は、播種期が土壤の最も乾燥した時期にあたるので、發芽のための水分を如何に土壤中に貯えておくかということである。そのため播種すると直ちに覆土し、さらに把・勞をかけて整地する必要があるり、もし耕耘が深く、土壤の攪亂が大きければ、土壤中の毛細管を深處で遮斷して、餘程保水に注意しなければ、旱害を受ける危険性が高くなる。この事を念頭において、まず本書の説を考えよう。

(耦犁とは)、私は二本のスキ先をもつ犁だと解している。(中略) 今日華北の耕種法からして、一人が犁把を執り、他の二人は耦犁ですきわられた播種溝にそれぞれ一條づつ播種し、覆土したものを

とみたい。(七四〇—四一頁)

この博士の説は、犁につくのが一人で、他の二人は犁の直後について、すぐに下種・覆土して行くのであるから、前述の土壤保水を考慮に入れてある點、きわめて合理的な見解である。しかし代田法の一環としてみた場合、「耕耘下種。田器皆有便巧」といつているから、犁の後の二人が、どのような便巧の下種の田器を使用したかという説明の欲しい所である。この「下種の田器」に重點をおいたのは熊代幸雄氏の次の見解である。

耦犁とは「スキ」でなく下種器である。一牛一先の耕犁をまず索き、その後に耦犁(二本のスキ先を持った穰)を牽いて播種する。耕犁には牛に一人、犁を把る者一人計二人、穰では、牛に人がつかず、把をとるもの一人。計二牛三人である。(筆者要約。漢・趙過の代田法考―天野元之助『中國農業史研究に寄せて』―農業經營通信五六號)

氏の見解は耦犁を下種器と考える點が新見解であり、代田法に耕犁と穰を併用するということは非常な卓見であるが、耦犁は引用文の前に出て来る耦耜と對應する語でもあるので、耦犁を穰と解してしまふには多少の不安が残る。その外の語説として、

(1)耦犁とは、二本の「スキ先」をもつた犁で、一人がリードし、二人が二本の犁をとる(つまり一人が牛の口とりし、二人が犁の柄をおさえるの意)。(Nancy Lee Swann (孫令蘭), Food and Money in Ancient China, 1950, P. 187)

(2)耦犁とは二本のスキ先を持ち、二人が二牛をリードし、一人が把を持つ。(田昌五耦犁圖より、「人民中國」一九六〇年八月號)

(3)耦犁とは二牛を用いて(獨立の)二犁を挽き、二人がおのおの

一犁を扶け、一人が二牛を牽引し、計二牛三人になる。(范文瀛中國通史簡編修訂本第二篇五四頁(1)(2)(3)については本書七四〇—二頁による)

この中范氏の説も特記すべき説であるが、もし氏のように獨立した「スキ先」一個の犁をならべて使用するならば、「用兩犁」か、または「犁を耦にして用う」とありたい。耦犁という以上、元來が獨立した「スキ先」一個であっても、一時的にくくって一つの犁として使用したものと見るのが自然であろう。孫・田兩氏の説は、犁そのものの説明としては反對の理由はないが、下種の田器、或は耕起後の作業について言及して、始めて首尾一貫したものと云うべき段階である。

以上の様に種々の説があるが、若し代田法の文中に、耕起後の手入れが一言書かれていれば恐らく耦犁の解釋も一定していたであろう。いわば、異説の輩出は體系的に記述された史料が比較的少く、往々にして特色ある部分のみ取出して記述されているため、假説を入れて、史料の間隙を合理的に埋めて首尾一貫した體系を作りあげなければならぬ。技術史の性格によるものである。耦犁一つについてもこのような状態にある現在、四千年の長い中國農業史の種々の問題を幅廣く取扱っている本書は、約四十年にわたって現實の中國農業を調査し、文献に親しんできた博士の經歷のじみでたものというべきであらう。

四

本書の特色はあくまで史料によった手堅い結論にあり、後學者に中國農業史のゆるぎなき基礎工事を提供してくれたわけである。では我々は本書の成果を如何に擴大してゆくべきであらうか。

第一には資料と實際との時間のズレを埋めることであろう。我々が現在認めうる資料は必ずしもそのものの存在の上限を示すものとは限らず、特に文献に見える史料の時期と、そのものが使用され始め、また一般化された時期と一致しない場合も多い。例えば珠江デルタ地帯に見られる「四水六基」の農法は(本書一七四頁)、文献では陳剪の農書に見られるが、最近の考古學的遺物によれば、これに類する農法はすでに後漢四川省に存在していたと思われる(一八五頁)。この例でも見られる如く、或る器具なり農法が、文献にあらわれた時は、それが普遍化し、一般化した後である場合がある。従つて博士のあつめられた文献の上に立つて、實際の時期と、文献上の時期とのズレを埋める事が、まず後學者のなすべき事である。第二は個々の問題の深化である。この面について尚問題が残っている事は、すでに趙過の代田法を例に引いて述べた所であつて、ここで繰返す必要はない。第三は廣い意味の農業史への擴大、すなわち農業技術の諸要素—農具・作物・灌漑・肥料—、その他土地問題等の生産關係を總合して、各時代の農業の發達の跡を究明すると共に、更に進んでは中國農業と中國社會の特性との關係を求めてゆく事である。もつとも技術と社會の結節點を究明する事は「言うは易く、行ふは難い」ものであるが、史學者として破らねばならない壁である。勿論博士もこの事には留意され、自序にも大綱を述べ、第三章第四節は、博士の中國史觀の表明でもある(八四二頁あとがき)。また本書には採録されていないが、「殷代産業に關する若干の問題」(東方學報京都第二五)を始め、各時代の農業の構造と展開を論じ、更に廣く農業史・産業史を取扱っている。仄聞するに博士は、身長の高さにも違する原稿を整理し、五巻にわけて

公刊される豫定であつたが、種々の事情で一卷にまとめたという事である。もし最切の豫定の如く、五巻が公刊されるならば、ここにのべた私の言は或は不要となるであらう。

(米田賢次郎)

唐宋時代の交通と地誌地圖の研究

青 山 定 雄 著

昭和三十八年三月 吉川弘文館
A5版 圖版八葉 本文六一七頁

このたび青山定雄教授が「唐宋時代の交通と地誌地圖の研究」を出版された。以前から同教授の従來の研究論文に啓發され、東洋史の分野で歴史地理學と呼ばれている學問に關心を持ってきた者にとっては、この出版は大きなまとまった知識の收獲であるばかりでなく、學界にとりまことに慶賀すべきことである。そして近來いわゆる社會經濟史學の盛行の影にかくれてしまつた觀を呈していた東洋歴史地理學界に漸く活氣が感ぜられる。先年刊行の松田壽男博士著「古代天山の歴史地理學的研究」と併せ考えると、この兩快學を中心に歴史地理關係の論考が従來よりやや多く發表せられているように思われる。

本書は二編から成る。第一編は「唐宋時代の交通」第二編は「唐宋時代の地誌地圖」で、最初に序文が見える。この序文には、まず北シナに興つた中國民族が南方に向い發展し、清の專制的中央集權國家ができるまでの歴史をきわめて簡単に述べ、交通の發達の觀點に立つて著者一流の中國史觀を展開している。そして、「唐宋時代における官用交通の發達と地誌地圖の編成の歴史を究明することは、

その時代の官僚政治ひいては統一國家の機能と限界とを窺う上にも重要な意味をもつと思われる」と言い、「本書において特に官用交通をとり上げたのもそのため」である、と述べている。「讀史方輿紀要索引支那歷代地名要覽」は餘りにも有名な勞作であるが、著者は人も知る通り若き頃から東方文化學院東京研究所において歴史地理を擔當され、今日にいたるまで數多くの論文を發表されており、この方面の碩學である。

第一編の第一第二は前に論考したものをさらに檢討を加えて詳述したもので、第九はその一部を前に重點的に論じたことがあるのを全般にわたり述べたものである。大體本書はかつて著者が發表した論文の内容から成るがこの第一と第二とは、まだ三十才前後の頃の若き著者が世界歴史大系に書いた唐宋時代の交通に關する研究をあらためて補訂し、主要交通路についてその位置、利用と變遷、道路工事等を述べている。第一「唐代の陸路」は五つの地域に分けて考察しまず河南山東方面に向う交通路から筆をおこし、長安より潼關、洛陽、汴州等の東方に通じる路を重要路と指摘し、當時中國を東西に貫く路の中でもっとも重要な大路であつたと強調している。さらに汴州から汴河にそい泗州に行き、南して揚州を経て福州方面にのびる交通路に觸れる。長安から河北山西方面に向うものは洛陽で前記汴河ぞい交通路と分かれ東北行し、孟津において黄河を渡り衛州(汲縣)を経て幽州に達する路をあげている。そして中唐以後藩鎮の獨立化にともないこの路が重要となつたと述べている。また同州蒲津關を経て太原に通じる路にも注目して、都から山西に達する要路と説く。三「湖北・湖南・江西及び廣東・廣西方面」、では長安東の瀾から藍田・商州・襄州・荊州を経て廣州に達する路を唐朝の